

## デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究 (4)

－フレデリック 5 世治世 (1746-1766 年) を中心に－

佐保吉一

### Fundamental Study on the Danish Absolute Monarchy in the Period of Intermediate Term (4)

- Focused on Frederik V's Social Policies -

SAHO Yoshikazu

#### Abstract

This paper aims to examine the social policies of Danish King Frederik V (reigned from 1746 to 1766), primarily through the analysis of laws enacted during his rule.

Frederik V, unlike his parents, was not influenced by pietism, and he lifted all restrictions on life and culture. He frequently appeared in front of the people, visited various places, and was very popular. His wife, a daughter of King George II of England, was also well-received by the people because she quickly learned Danish, raised her children herself, and did so in Danish.

However, Frederik V faced challenges due to severe alcohol dependency and a lack of interest in politics, neglecting the duties of his office. He delegated governance to his favorites while indulging in hunting, drinking, and liaisons. Fortunately, he benefited from competent German advisors, particularly A.G. Moltke and J.H.E. Berstorff.

While the king's personal influence was limited, his reign witnessed progress in commerce and trade, and art and science flourished. Moltke and the ministers skillfully kept Denmark-Norway neutral during the European conflicts of the time, including the Seven Year's War (1756-63).

The main social issues and policies during Frederik V's reign are outlined below:  
1) Forming Public Opinion: The government initiated public debate by collecting reform ideas from the public and later publishing them in magazines. This effort led to the establishment of the Agricultural Council in 1757, marking the beginning of agrarian reform in the late 18th century.

2) Advancing Social Welfare: Initiatives included the establishment of the Royal Orphanage in 1753, Frederik Hospital in 1757, and the introduction of a compulsory fire insurance system for towns by Royal Ordinance in 1761.

3) Promoting Cultural Activity: During the peaceful reign of Frederik V, the Royal Art Academy was established, and an expedition to the Orient was undertaken.

Overall, during Frederik V's reign, loyal and talented bureaucrats led the country's policies, representing the climax stage of "bureaucratic absolute monarchy." With a stable absolute monarchy system and a well-organized bureaucratic structure, the country enjoyed prosperity.

## 0. はじめに

2020年11月13日、デンマークの首都コペンハーゲンのある運河に胸像が投げ込まれた。報道によるとそれはデンマーク国王フレデリック5世の胸像であった<sup>1</sup>。投げ込まれた背景には当時世界中で広がりを見せていた Black Lives Matter (BLM) 運動の影響があった。例えば2020年8月7日には、過去に数多くの奴隷貿易船が出航した英国南部の港湾都市ブリストルでは、奴隷商人エドワード・コールストーン銅像が倒されて海に投げ入れられるという事件があったばかりである。フレデリック5世 Frederik V (在位: 1746-66年) はデンマーク絶対王制中期の国王であり、在任中には重商主義政策の進展や政治的に中立な立場を取っていたため、商業が発展し海外にも植民地を有した。特に1755年にはそれまで西インド・ギニア会社がカリブ海植民地を運営していたが、経営不振に陥ったため、フレデリック5世をトップとする国家が直接経営に携わるようになった。そのために国王が奴隷貿易・奴隷制の首謀者とみなされ、BLM運動がイギリスやフランスといった奴隷貿易を行っていた旧宗主国を座席した際、加害者の象徴であるフレデリック5世の胸像が海に投げ込まれたのであった<sup>2</sup>。

本稿ではこの絶対王制が導入されて5代目の国王にあたるフレデリック5世に関して、その治世を一部文化面も含めながら社会政策の観点から概観し、そのうえでフレデリック5世時代における絶対王制の特徴を明らかにしたい<sup>3</sup>。

## 1. 新国王と側近

### 1-1 王位継承とその特徴

敬虔主義の影響を強く受けたデンマーク国王クリスチャン6世は、1746年僅か47歳で逝去し、長男の王太子フレデリックがフレデリック5世として王位を継承した。特徴的なことに、王位継承に関して、継承の前後で主要閣僚(政権上層部)の入れ替えは殆ど実施されなかった。このような事態は絶対王制導入以来初めてのことであった。フレデリック5世は父王時代の主要な大臣や枢密院メンバーを引き継いで重用したのである。具体的には、デンマーク官房のホルステイン J.L.Holstein、ドイツ官房のシューリン J.S. Schulin がそのまま職に留まった。シューリンは1750年に死去するが、その後任がドイツ系の J.H.E.ベアnstorf Bernstorff で

あった。彼は次第に国王の信任も取り付けて後には首相格となり、特に対外関係および産業関係に影響力を有した。この他に宮廷長官 *overhofmarskal* モルトケ A.G. Moltke<sup>4</sup>、そしてレーヴェントロウ *Ditlev Reventlow* を合わせて、彼らは周囲から国王のお気に入り *favorite* と呼ばれ、実質的にフレデリック 5 世時代のデンマークを統治していたのである。

このようにフレデリック 5 世の政権ではこれまでの絶対王制政権とは異なり、前政権との継続性 *kontinuitet* がみられ、政策の一貫性が担保されている。そのため後にみるように重商主義政策が一貫性を持って実施され、商業繁栄時代が現出するのである。

## 1-2 新国王と婚姻（新国王と行状）

まず、絶対王制が導入されて以来 5 代目にあたるフレデリック 5 世についてその特質を詳しくみておきたい。

王太子フレデリック（後のフレデリック 5 世）は、次代の絶対王制を担うに相応しい英才教育を受けたわけではなく、数人の家庭教師から個別の教育を受けただけであった。教師もフランス語以外はドイツ人が担当し、普段はドイツ語を話す生活であったが、デンマーク語も少し話した<sup>5</sup>。

王太子フレデリックは父母が熱心な敬虔主義者の下に育ったが、自身は敬虔主義の影響を受けず、内向的な両親とは異なり、積極的に城外に出て、人々の面前、全ての階層の者と気さくに交わった。娯楽を好み、狩猟、ワイン、女性を愛した。彼は専ら狩猟に熱中し、狩猟館である *Jærsborg* によく滞在した。悪友と街の飲み屋や売春宿に出入りし、遊興を繰り返していた。そのため父王クリスチャン 6 世は、一時期摂政政府の樹立を考えたが、国王法との関係で実現が叶わず断念している<sup>6</sup>。

1740 年に堅信式を迎え、その後は王位継承者として枢密院会合 *Geheimekonseilet* に出席するようになった。周囲は王太子の放蕩を少しでも減じようと、結婚が画策されることになった。外交的で陽気な性格の配偶者が求められ、白羽の矢が立ったのはいとこで英国王ジョージ 2 世の娘ルイセ *Princess Louise* であった。婚姻話は順調に進み、フレデリックは 1743 年には英国王女のルイセと結婚した。彼女は明るく、デンマーク語も話し、人々からも愛された。ルイセは生まれた子ども達も自らの手で、そしてデンマーク語で養育した<sup>7</sup>。この彼女の言動がその人気をあげ、夫であるフレデリック 5 世の人気も上昇した。結婚直後こそフレデリック 5 世は馴れ親しんでいた *Orgier* (乱痴気騒ぎ)<sup>8</sup>から遠ざかるようにはしていたが、しばらくすると悪習は繰り返される。狩猟のために男だけで出かけては狩猟館で深酒をし、祖父のフレデリック 4 世ほどではなかったが、複数女性との関係も続いた。よく知られているのが市民出身のマダム・ハンセン *Madam (de) Hansen* との愛人関係で、彼女とは 1746-51 年の間に 5 人の子どもをもうけている<sup>9</sup>。

1751 年 12 月、王妃ルイセが国王との 6 人目の子どもを出産中に死去するという痛ましい事態が発生した。さすがのフレデリック 5 世も自分の悪行を悔い、気も塞ぎがちになった。そこで、国王の立ち直りとその後の行状をさらに悪化させないためにも、モルトケを中心に再婚計画が急いで画策された。最終的にはプロシアのフレデリック大王の義理の妹であるブラウンシ

ユヴァイク＝ヴォルフエンビュッテル Braunschweig-Wolfenbüttel のユリアネ・マリエ Juliane Marie(1729-96)が選ばれ、王妃の死から半年後の 1752 年 6 月にフレデリクスボー城教会で結婚式が挙行された。そして 1753 年には推定相続人のフレデリック王子<sup>10</sup>が誕生している。しかし、当時 22 歳の王妃の力を以てしても、国王の女性関係や飲酒を制御することは叶わず、フレデリック 5 世は相変わらず次々にパートナーを替えては情事・飲酒に耽ったのであった。

次章ではこのような特質をもつ国王と政治との関わりを中心にみていきたい。

## 2. 政治動向と経済発展

### 2-1 内政

フレデリック 5 世は日常の政務には関心がなく<sup>11</sup>、遂行能力にも問題があったため、内政に関しては一番仲の良かったモルトケ A.G. Moltke (1710-1792) に全幅の信頼をおいて任せていた。フレデリック 5 世時代の内政を理解するには、このモルトケ抜きには語れないため、まずモルトケについて述べたい。

モルトケはメクレンブルク出身で 1730 年にクリスチャン 6 世が即位する前に当時 7 歳であった王太子フレデリック (後のフレデリック 5 世) の侍従 *kammerpage* となり、それ以来年の差は 12 歳あったが、二人の友情そして依存関係が始まったのである。モルトケ自身は当時の貴族子弟の慣行であった海外遊学の経験はなく、専門的な教育も受けていなかった。親戚がフレデリック 4 世と懇意であり、その関係で宮廷入りすることになったのである。1743 年には王太子フレデリックの侍従長 *hofmarskal* になり、王室とその経費についても担当した。そして 3 年後、フレデリックが国王に即位した際には宮廷長官 *overhofmarskal* に抜擢された。なお、宮廷長官就任後には将来のデンマークの見取り図ともなる国家計画を発表している<sup>12</sup>。

それから 20 年間、モルトケは国王の死去までデンマークにとって最も重要な者として国王に仕える。前述のように国王が自立的な判断が出来なくなるにつれてモルトケの重要性が増した。ある意味で彼がデンマークを動かしていたと言っても過言ではない。1749 年に首相格のシューリンが加齢のため機能しなくなると、海外からの至急報 *depache* は全てモルトケのもとに届けられることとなり、後には彼自身が海外の公使館とやり取りをする。シューリンの亡き後は、ベアンストーフがその後を継いだ。彼の了解のもとこの慣行が続けられている。ベアンストーフが政権入りしてからは、政治的、経済的、文化的な政策については二人の考え方は一致しており、両者が互いに協力する形で進められた。

フレデリック 5 世治世末期の 1763 年になってようやく枢密院メンバーとなった。さて、国王との関係であるが、後に二人で交わしたノートが発見され、両者の親密な関係を示す重要な史料となっている<sup>13</sup>。

またモルトケは革新的な人物ではなく、基本的には何事にも注意深く伝統を重んじる保守的な人物であった。しかしその関心分野は多岐にわたっており、ある意味でジェネラリストでもあった。たとえば西インド・ギニア会社やアジア会社の経営にも携わった一方で、後述する経済雑誌の発行にも関わっている。さらには公衆衛生や貧民保護にも関心があり、フレデリック

病院の理事長を務めている。加えて 1754 年以降はフレデリクススターデン **Frederiksstaden** と呼ばれる、国王の名を冠した新しい街作りにも建築家のアイグトヴェズ **Eigtved** と共に尽力している<sup>14</sup>。

モルトケにとって幸いだったのは行政機構からの信頼も得ていたことである。ある意味では国王と大臣の間も繋いでいた<sup>15</sup>。また当時の最高諮問機関であった枢密院自体保守的・貴族的であったため、さらには国王の臨席も必要なく会合が頻繁に開催されたため、情報共有がなされ、物事が円滑に進んだ。このようにモルトケはまず内政を押さえ、前述のように 1749 年からは外交の詳細も説明を受けることとなり、国王に外交面での助言もすることが可能になった。こうしてデンマーク史において初めて宮廷長官職が最高権力を持つようになったのである。さらに彼は国王の特別会計も握っていた。

なおモルトケは国王に忠実ではあったが決して清廉潔白な人物ではなかった。国王から地所 **Bregentved** を与えられ、それまでの所有地も含めると、当時国でも有数な土地所有者となり、伯爵に任じられた。そして、自分の子ども達をよい官職につけるよう計らってもいる<sup>16</sup>。

次に国王のお気に入りの一人であるベアンストーフ (1712-72) についてもみておきたい。彼はハノーバー生まれのドイツ人外交官で、青年時代よりクリスチャン 6 世に気に入られ、1732 年にはデンマークの外交官となり、ザクセンやフランスに派遣された。シューリンが急死した後 1751 年にはデンマークの外相に就任し、枢密院のメンバーにも加わっている。当時のデンマークの外交目標はまずゴットープ問題を解決すること、そして宿敵スウェーデンが絶対王制を再導入することを阻むことであった。スウェーデンの王位継承問題が片付いた後、ベアンストーフが目指したのはデンマークを当時のヨーロッパにおける大戦争から遠ざけること、そして中立を維持することであった。そのために 1765 年に同盟政策を変更し、同盟相手国をフランスからロシアにかえた。そのおかげで後に領土交換が実現し<sup>17</sup>、ゴットープ問題がようやく完全解決をみるのである。

またベアンストーフは当時の典型的な重商主義者でもあり、総合経済商業省 **General-Landets Økonomi- og Kommercekollegium** (以下、商業省と略) の要職も務めた。文化にも関心がある彼はドイツの文学者を招聘したり、後に活躍するフランス人彫刻家サリィ **J. Saly** の招聘にも関わっている。さらには自領で先駆的な農業改革の試みも行なっていた。

## 2-2 外交

スウェーデンでは 1743 年頃に王位継承問題が起ったが、その中でデンマーク国王フレデリック 5 世も正式な継承候補者の一人であった。このこともあり、当時ハノーバー侯でもあった英国王ジョージ 2 世の後ろ盾も期待して、先述のルイセ王妃との婚姻の話が出てきたのでもあった。結局スウェーデン＝ロシア戦争の結果、ロシアの圧力でゴットープ家のアドルフ・フレドリック **Adolf Fredrik** がスウェーデンの王位継承者に確定した。このことはゴットープ問題に悩まされていたデンマークにとって新たな頭痛の種となるのであった。

その後の国際関係をみると、1756 年に七年戦争が勃発し、デンマーク外交に大きなインパクトを与えていたロシアがそれに参戦していたため、デンマークも中立を維持しながらの軍事力

増強を余儀なくされた。即ち海軍は一年を通じて武装するようになり、1758年にはベアンストーフの尽力で、フランスと軍事同盟を結ぶに至る。ゴットープ問題に関してはフランスからの援助がそこには盛り込まれていた。陸軍も次第に強化され、1761年7月に6,000人、62年4月にはさらに2,000人が新たに配備された。

このような中立維持のための軍備増強および潜在的な軍事的緊張により、デンマークは軍事力の増強・近代化が強く求められ、抜本的な軍制改革が待ったなしの状況となる。それを任されたのが1761年にデンマークに将軍として雇用されたフランス人将軍サン・ジェルマン J.C. de Saint-Germain で、彼は欧州大陸での豊富な戦争経験を有していた<sup>18</sup>。

そして1762年7月、以前より領土問題で険悪な関係にあったホルシュタイン・ゴットープ家出身のペーターが、ロシア皇帝ピョートル3世として帝位に就いたため、デンマークとロシアの関係が一触即発の状態になった。デンマークは北ドイツのメクレンブルクに総勢約2万7千人の兵を派遣し、ロシアはそこから僅か300キロメートル離れた地点に約4万人の大軍を派兵していた。しかし、突然ピョートル3世はクーデターによって廃位され、その妻エカテリーナが帝位に就くにおよび、全ロシア軍が即時退却したため、ようやく両国関係は落ち着きを取り戻した。その後デンマークは伝統的であった親ロシア外交を継続することになる。結局、七年戦争・その他の影響でデンマークの軍事費は1757-62年の5年間で67.6パーセントも増加した。そのためこの軍事費を捻出する目的で、王領の一部が売却されたり、1762年には12歳以上の国民一人に1リースダーラの特別税 Ekstraskat が課せられた<sup>19</sup>。

外交的にみると、フレデリック5世治世下では上にみた1762年のロシア危機が最大のものであった。これに対して軍事力の抜本的改革を実施すべく、政府はフランスから招聘していた将軍を改革に対応させた。しかし、ロシアとの危機が一時的で去ったため、肝心の軍事改革は危機対応の軍事支出が増大したという財政的理由から、急務とはされなくなってしまった。

その後のロシアとの関係であるが、1765年に同盟条約を締結した。その際エカテリーナ2世はデンマーク側からの提案である領土交換、具体的にはオルデンブルク＝デルメンホルスト Oldenburg-Delmenhorst とゴットープ領ホルシュタインの領土交換、に理解を示した。これをうけて2年後の1767年、ロシアと暫定的領土交換条約を締結するに及んだ。その内容はロシアのエカテリーナ2世は未成年の息子ポールの為に以前のゴットープ家領スレスヴィーに対する全ての権利を放棄すること、及びポールが成年に達した際、オルデンブルク＝デルメンホルストはゴットープ家領ホルシュタインと領土交換を行う、というものであった。そして1773年、ロシア皇太子ポールが成年に達し、1767年に締結した両国間の領土交換条約が発効することとなる。これにより長年に渡るゴットープ家との領土問題が解決し、宿敵スウェーデンを挟み撃ちにすることが可能となった。ここに1720年以来のデンマーク外交目標は達成され、ようやく念願の対外的平和が訪れるのである。

### 2-3 商業の発展

デンマークはバイキング時代以来、常に海を通じて発展してきた。その舞台は主に北海、バルト海であったが、クリスチャン4世時代(1588-1648)になるとさらに遠方の海域、すなわ

ち大西洋やカリブ海、そしてインド洋にまで進出する。彼は同じ海洋国家であるイギリスやフランス、そしてオランダの成功を間近で見て、当時流行の重商主義政策を積極的に採用した。国内では衣料品生産のマニファクチャーを設立する一方、アイスランド会社、東インド会社等の貿易会社を設立し、さらに海外拠点求めてアフリカやインドに探検隊を派遣した。その後の国王達も絶対王制の経済的基盤を固める目的で同様に重商主義政策を推進し、地中海はもとよりインドをはじめ、アフリカの黄金海岸、西インド(カリブ海)にまで活動範囲を拡大し、貿易拠点や植民地を建設した。

デンマーク絶対王制中期でみると、1720年に終結した大北方戦争の後、デンマークは世紀半ばまで農業危機を経験し、1730年代前半には最悪期を迎えた。穀物価格は下落した上に、牛疫病で約30万匹の牛が死んだ。その後次第に経済の停滞は回復し、フレデリック5世の治世下では戦争もなく、中立政策のおかげで経済的に発展し、後に商業繁栄時代 *Det florisante handels period* と呼ばれる時期を迎える。エーアソン海峡を通航する商船が急増し、例えば1750-1800年で通行税収入が4倍にもなった。1800年頃でいうとその額は国庫収入の10%にも相当する高額であった。農産物の収穫量が増加し、穀物価格も上昇するなかでデンマークは好景気を迎え、生活水準も上昇した<sup>20</sup>。

なかでも好調なのが植民地貿易で、これは通常独占貿易会社を通じて行われた。植民地貿易は特にコペンハーゲンの商人を利した。例えばアフリカ、西インド、インド、中国からの交易品である香辛料、綿、絹、茶、砂糖、ラム酒は国内消費用を除いてコペンハーゲンより再輸出された<sup>21</sup>。イギリスやフランスといったヨーロッパの大国が戦争をしている間、デンマークは努力を重ねて中立を維持し、彼らの代わりに交易を行った。そのためデンマークの首都であるコペンハーゲンには商船と共に大量の植民地物品が集結し、北ヨーロッパの一大貿易拠点となったのである<sup>22</sup>。フレデリック5世の治世は、ここまで内政的にも安定しており、平和が保たれ、経済的繁栄もみられた。デンマークではこれまで農業経済が国を支えていたが、ここに来て商業、海運、工業が成長し、社会の中で重要な意味を持つようになってきた。

### 3. 時代思潮とデンマーク社会

#### 3-1 敬虔主義

敬虔主義とは17世紀末にドイツ南部の都市ハレで始まったプロテスタント内の信仰復興運動すなわち信仰上の覚醒運動であった。それはルーテル教会の正統主義・形式主義に対する反動として始まり、敬虔さに大きな価値を置き、内面的・個人的な神への信仰を基とした人生を求めた運動であった。ドイツと地続きのデンマークでは、フレデリック4世の治世後半から国王を中心とする王室で流行し始め、次のクリスチャン6世時代には国王夫妻は熱心な信奉者として知られた。そのため宮廷はもちろん市民生活においても宴会や娯楽は戒められて禁止され、居城の周囲には鎖が繋がれて国民とは距離が置かれた。その影響は多方面に及び宮廷の中や、国王の取り巻きも敬虔主義の信奉者が多くいた。国全体が重苦しい雰囲気にも包まれた。その一方で、敬虔主義は神の御言葉を伝える聖書を読む力を伸ばそうと、教育、特に教育を施す学校設置に寄与している。具体的には1720年には王領における騎士学校設置、1739年には学校

令による農村学校の設置に結実している<sup>23</sup>。さらに 1735 年には堅信式が義務化されるなど宗教を主軸とした教育が推進された<sup>24</sup>。

フレデリック 5 世時代は先述のように前時代とは異なり、娯楽が解禁され、劇場も再開・新規設立となり、首都を中心に明るさが戻った。敬虔主義の大元であった国王も遊興のために市内に姿を現すなど敬虔主義における制約は消失した。しかしながら敬虔主義がその役割を全く終えたわけではなく<sup>25</sup>、敬虔主義の影響を色濃く受けたポントビダン Erik Pontoppidan のカテキスムス教本『神を畏れることの真実 Sandhed til Guds frygtighed』などは、青少年の教科書として 1800 年頃まで使用され、デンマーク・ノルウェーの宗教思想・教育に大きな影響を与えている。

また前王の時代に大きな進展を見せた学校教育についてはこの時代、特に目立った進展は見られず、設置された学校での教育が試行錯誤を繰り返しながら実施・展開されていった。そしてその教育の成果が教区監督による監察 *visitat* で確認されたのであった。

### 3-2 啓蒙主義

18 世紀前半にヨーロッパ本土で流行っていた啓蒙主義もイギリスやフランスへの遊学・留学を通じてデンマークにも流入してきた。このデンマークにおける初期の啓蒙思想普及の旗手は何とんでもホルベア Ludvig Holberg (1684-1754) とスニードーフ Sneedorff (1724-64) である。ホルベアはノルウェー生まれの学者・作家で、青年時代よりイギリス、フランス、オランダ、イタリアの大学に遊学し、当時の最先端を行く学問・思潮に触れていた。1717 年からはコペンハーゲン大学教授を務める一方で喜劇を書き始めるが、特に鋭い社会風刺と鮮やかな庶民生活描写に秀でていた。それゆえ「北欧のモリエール」とも称される。例えば代表作の一つである『丘のイエツペ Jeppe på Bjerget』と呼ばれる喜劇作品は、それまで題材にもならず関心も払われなかった農民を主人公にしたもので、この作品によって世の人に農民階層の存在、賦役等で抑圧された農民の状況を知らしめたのである。彼はドイツやフランスへの留学を通じて啓蒙主義の影響を受け、帰国後『自然権及び国際法入門 *Introduktion til naturens og folkerettens kundskab*(1716)』といった書物を出版している。

当時のデンマークの大学、つまりコペンハーゲン大学は基本的には牧師を養成する場であり、フランスやイギリスのように最先端の学問を学ぶところではなかった。それゆえデンマークにおいてはそれらの国のように啓蒙主義が大学を通じて広がった訳ではなかった。その役割を担ったのが次節で述べるソーロー・アカデミー *Sorø Akademi* であり、その学校こそはホルベアが私財を投げ打って再興したものであった。このアカデミーは元来貴族子弟が国家上級官吏になるための教育を行うべきところであるが、傾向的には貴族的とはならず、逆に啓蒙時代における人文主義的思想の活動・普及の舞台となったのである。ソーローアカデミーの教授で啓蒙主義を広めたスニードーフについては次節で取り上げる。

なおデンマークでは敬虔主義から啓蒙主義への明確な移行時期は特定できず、フレデリック 5 世の時代になっても敬虔主義の影響を受けた人物が活躍している<sup>26</sup>。例えば、ポントビダンやモルトケ、ベアンストーフ、レーヴェントロウである。



### 3-3 ソーロー・アカデミー Sorø Akademi

元々は司教アブサロンが 1161 年頃に設立した修道院がその端緒であるが、肥沃な領地を得たため経済的には安定し、デンマークで最も裕福な修道院と言われた。1536 年の宗教改革の後領地は王領となり、1586 年にフレデリック 2 世が寄宿学校を設置し、貴族子弟 30 名、非貴族子弟 30 名が学んだ。その後、クリスチャン 4 世が 1623 年に大学に類似した役割を果たす貴族のためのアカデミーを創設した。貴族の子弟が国家学を学ぶ場としたのである<sup>27</sup>。1747 年にはフレデリック 5 世が新アカデミーを設立したが、まもなく財政危機に見舞われた。それを個人的に救ったのが先述のホルベアである。自己所有領地をアカデミーに寄付した。このアカデミーは元来貴族子弟が国家の中央官職に就くために必要な国家学等を学ぶ場所であるが、傾向的には保守・貴族的とは成らず、逆に当時の先端を行く啓蒙主義思想の活動舞台となった<sup>28</sup>。それゆえ、アカデミー出身の若い官僚は当時何らかの形で啓蒙思想の影響を強く受けていた<sup>29</sup>。

そのアカデミーで教授職に就いていたのがスニードーフである。彼は作家であるとともに教育者でもあった。20 歳代に 3 年間フランスなどに留学し、モンテスキューの影響を強く受けた。帰国後、名門寄宿学校ソーロー・アカデミーの法律・政治学の教授となり、ここで後に政府の行政の要となる生徒達に、新しい啓蒙思想を吹き込んでいくのである。スニードーフはまた、フランスのヴォルテールの著作をデンマーク語に翻訳したり、1757 年には『市民の政府について Om den borgerlige Regering』というモンテスキューの考え方を分かり易いデンマーク語で記した書籍を出版している。

スニードーフは 40 歳で早逝したため約 2 年という短期間となってしまったが、『愛国的傍観者 Den patriotiske Tilskuer(1761-63)』という啓蒙雑誌を自ら発行している。この雑誌はその後続く社会時評を掲載した草分け的なもので、雑誌を通じて彼は農民階層の重要性と農民が「自由と土地所有権 Frihed og Ejendomsret<sup>30</sup>」を持たねばならぬことを主張した。

このようにソーロー・アカデミーでの教育を通じて啓蒙思想が広がり、それがデンマークの若い官吏のなかに根付き、次のクリスチャン 7 世時代において政策のなかに反映されていくのであった。

### 3-4 文化の振興

絶対王制のもとでの文化の発展はこれまで、絶対主義に対抗するものではなく体制を擁護し支えるものでもあった。それゆえ絶対王制の側も国王によって濃淡はあるものの文化の振興を推進していた。フレデリック 5 世時代には経済的な繁栄がさらに文化を進展させるという好循環が顕著に見られた。

フレデリック 5 世自身は文化的な関心は薄かったが、側近のモルトケを始め当時の為政者は学術・芸術にも理解を示し、様々な試みを行なっている。その結果として、国王の名を冠した建築物、芸術・学術関係の物がこの時代多数現れている。例えばフレデリック教会<sup>31</sup>である。1754 年には芸術アカデミーKunstakademi、正式には王立デンマーク絵画・彫刻・建築アカデミー-Det Kongelige Danske Skildre-, Bildhugger- og Bygnings-Academie が設立されている。

本部はコンゲンス・ニュートーヴ Kongens Nytorv にあるシャーロッテンボー宮殿に置かれた<sup>32</sup>。初代の院長は王立建築士のアイグトヴェズ Nicolai Eigtved で、その死後はフランス人彫刻家サリイ J.F.J. Saly が院長を務め、パリの芸術アカデミーを範とした。ここではまず海外から当時著名な芸術家を招聘するのと並行してデンマーク人学生を芸術の都パリやローマに留学させた。約 15 年程経過すると外国人芸術家達が帰国し、その後には派遣した留学生達が現地から知識と経験を持って戻って来た。その中には 18 世紀後半、19 世紀前半に活躍するアビルゴー Nicolai Abilgaard、イェンス・ユール Jens Juel などがいた<sup>33</sup>。

また 18 世紀の前半からは多くの書物が発行され、出版文化も華やかな時期を迎えた。その筆頭格が先述のホルベアであり、彼は有用な nyttig 市民と愛国者は社会と国家に対する意見を表明する権利と義務を有すると表明し、彼自身もそうしてきた<sup>34</sup>。さらに彼は出版物を通じて、デンマーク語の表現をより洗練されたものにするという功績を残したのである<sup>35</sup>。

クリスチャン 6 世時代後半より学術の進展もみられ、様々な学術団体が設立されていく。早くは 1742 年に、ホルステインとグラム Hans Gram<sup>36</sup>によって王立デンマーク学術協会 Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab が設立されている。そして 1745 年には、後に「祖国の歴史のための王立デンマーク協会 Det Kongelige Danske Selskab for Fædrelandets Historie」と呼ばれる学術団体が設立され、同年発刊された『デンマーク・マガジン Danske Magazin』という雑誌は現在に至るまで刊行が継続している。

そしてフレデリック 5 世時代になると、1759 年にはスニードーフが「有用な学術振興のための協会 Selskabet til de skønne og nyttig Videnskabers Forfremmelse」を設立している。そして特筆すべきは、1761 年に政府はデンマークの言語学者ハウン Christian v.Haven 率いる学術探検隊をアラビアに派遣したことである。これは国際的にみても当時としては野心的な試みであり、7 年後に唯一の生存者である地理学者ニーブーア Carsten Niebuhr が膨大な資料を携えて帰国した。彼が正確に複写したペルセポリスからの資料・文献は後にこの楔形文字で書かれた古文書解読の基礎となり、メソポタミアの古代文明理解に貢献したという普遍的な意義を有するものであった。

またこの時代には大衆文化の振興もみられた。前述のように前王の時代は敬虔主義の影響を受けて娯楽が制限され、文化の中心でもある宮廷でも華やかな宴会などが開催されず修道院のようであったという。一般人の生活の中でも特に首都に住む者にとっては重々しい雰囲気であった。これが、前王とは性格が真逆のフレデリック 5 世が即位するにおよび、その雰囲気が一新される。まず 1747 年 5 月に、コペンハーゲンの Laederstraede に新しい劇場が開場、その翌年には同じコペンハーゲン市内のコンゲンス・ニュートーヴにある劇場の新舞台（観客数 728、現在の王立劇場）が落成している。これらの劇場では社会風刺を含んだホルベアの演劇が上演され、人々の間に知らず知らずの内に先に述べた啓蒙思想の影響が広がった<sup>37</sup>。換言すると啓蒙主義が首都を中心にデンマーク社会に浸透していったのである。

## 4. 社会福祉政策

### 4-1 王立養育学校 Det Kongelige Opfostringshus

フレデリック 5 世統治下、デンマークでは様々な福祉施設の設置や施策が実施された。施設では、1753 年に王立養育学校がフレデリック 5 世によってクリスチャンスハウンに設立された。当初は母子家庭の貧しい少年が入学し、手工業において手に職をつけること、そして水夫となって海に出ることを支援する学校であった。手工業面では織物に関する技術を習得し、海事面では必要な技術の他、英語やフランス語・オランダ語そして簡単な算数を学んだ。この学校についてはモルトケではなくベアnstorf が主導して設置された。なお同校での教育は時代と共に良い評判を得、1781 年からはコペンハーゲン市に運営が委託されている<sup>38</sup>。ユニークなのは学校の運営資金を得るために、富くじ lotteri を販売したことである。

このように、国家が母子家庭世帯に対する教育と就労支援を組み合わせた特色ある福祉政策を実施したことは注目に値する。

### 4-2 王立フレデリック病院 Det kongelige Frederiks Hospital

フレデリック 5 世時代には一般のための病院も設置されている。国王の名を冠した王立フレデリック病院がそれで、フレデリック 5 世によって設置され、1757 年に竣工した。設置場所は新たに設けられたフレデリクススタード地区であった。計画自体はモルトケが主導し、建築はアイグトヴェズが担当した。300 人の収容が可能で、治療不能ではない貧民のための療養病院であった。1759 年からは一時的に産婦人科も設けられている (~1787)。1870 年より特別な治療が必要な場合に限り、地方からの患者の受け入れも始まった。ここはデンマーク最初の公的な、そして現代的な意味での病院であり、後にはアンデルセンやキェルケゴールも入院している<sup>39</sup>。

なお、1910 年に現在の国立病院 Rigshospital が設置され、それによりフレデリック病院の病院としての機能は終わった。その後建物は美術工芸博物館 Kunstindustrimuseum として使用されている<sup>40</sup>。

また、このフレデリック病院の道路を挟んで反対側に「一般病院 Almindelig Hospital」が設置された。これはコペンハーゲン市の新しい救貧施設で、それまでの Brøndstrædernes Hospital に取って代わるものであった。200 名にのぼる完全収容者の生活の場であり、400 名用の一時避難所、そして稼ぎのための作業の場でもあった。さらにコペンハーゲンには精神病患者と性病患者のための聖ハンス Skt.Hans 病院も設置されていた。

フレデリック 5 世時代には各種病院の設置が進んだことより、公的に貧者をはじめ病人を救済しようとする国家の姿勢がうかがえる。

### 4-3 アシステンス (教会) 墓地 Assitens Kirkegaard

1760 年 11 月、コペンハーゲン市内に墓地用の土地が不足していたため、市壁の外側にアシステンス墓地が設立された。その背景には 1711 年に流行したパンデミックであるペストの蔓延がある。コペンハーゲンだけで約 23,000 人が亡くなり、早急に (教会) 墓地が必要となった

ため6ヶ所で墓地が急造されたが、いずれも市内（市壁の内側）であった。死者数に対して墓地の不足が顕著となり、ホルメンズ教会墓地では棺が地面の上に置かれ悪臭を放っていたといわれる。そしてその悪臭を蹴散らすために、大砲が撃たれたほどである。

そして1760年になってようやく、市内に位置した過密かつペストの名残があつて危険な状態であつた先の墓地6ヶ所を取り壊すことになった。今度は市外の、以前はたばこ栽培地であつた場所に新たな墓地が建設されたのである。裕福な市民達は中心部から離れて、寂しい場所に埋葬されるのを避けていたため、その新墓地は専ら貧者用の墓地となった。その潮目が変わつたのが1785年に市内在住の戦争省高官、アウグスティン Johan Samuel Augustin がアシステンズ教会墓地に埋葬されることを希望したことであつた。その後埋葬希望者が増加する中、コペンハーゲン市民も緑豊かな新墓地へ散歩やピクニックに出かけるようになり、新墓地が受け入れられていった。

なお、現在でも緑が多く市民の憩いの場であるアシステンズ墓地にはアンデルセン他著名人の墓もあり、観光名所ともなっている。

#### 4-4 1761年の地方都市に対する強制火災保険

1728年に首都コペンハーゲンで発生した大火の影響は甚大で多くの破産者を生んだ。この教訓から、1731年に勅令により火災保険の仕組みが導入された。それを今度はコペンハーゲン以外の地方都市に拡大して、同様な火災保険システムを政府が法律でもって導入することになった（1761年1月13日）。

保険システムを導入した法律は、正式には「デンマークにおける全ての地方都市に対する火災保険布告 Brand-Forsikrings Anordning For alle Kiøbstæder i Danmark」と呼ばれ、当時国内にあつた97ヶ所の地方都市が対象であつた。この保険事業は国家の事業であり、事務局はデンマーク官房 Kancelli の建物の中に置かれた。

以下、法令にもとづいて火災保険の主な内容をみていく。

- 1) コペンハーゲンを除くデンマーク国内の地方都市における建物は、それが私的・公的、大小・新旧を問わず、今後の火事の場合は保障されるため、従来の火災準備金 Casse を停止し・廃止する(第1条)。
- 2) この有用で重要な保険業務は速やかに遂行する必要があり、家屋の価値を家屋評価官が査定し、その書類を3部作成し、一部は商業省に送付し、次の一部は監督管区行政長官 Stiftamtmand が保存し、最後の書類は都市の行政機関等に保存しなければならない。この評価査定業務は法律公布後8週間以内に終了する必要があり、期日に遅れる場合は罰則として都市の貧民に5リースダーラの罰金を支払う(第2条)。
- 3) 都市建物の課税登録が終了し、署名がなされた日から、この火災保険は有効である(第3条)。
- 4) 火災が発生した際には関係の都市 magistrat または代官 Byfog が商業省と監督管区行政長官 Stiftamtmand に報告しなければならない(第6条)。
- 5) 関係都市行政機関あるいは町代官は火災が発生した時から迅速に法的な証人を探し、損害

を受けた者の氏名・住所を確認し、損害を査定しなければならない。そしてその書類を監督管区行政長官経由で商業省に提出する。市当局が実施する分配金査定が定められた期日より遅延する場合は 2 リースダーラ以下の罰金を支払う必要がある (第 7-8 条)。

- 6) 必要な証人を得ることができ、損害が査定され、保険分配金額が決定した場合、保険金は実際に火災にあつてから 10 週間以内に支払われる (第 10 条)。
- 7) 火災保険金に課税をしてはならず、保険金は消失または損害を受けた家屋を建て直すためだけに用いられる (第 15 条)。
- 8) デンマークの農村部における土地所有者が、自己の建物や家屋をこの地方都市火災保険に加入することを希望する場合、申請は許可される。申請は商業省に申し出、その後必要な処置が講じられる (第 20 条)。

上記法令の内容をみると、火災保険に関する規約が詳細に述べられている。どの行政組織が担当し、何をどう行なうのかも子細に決められているうえに、評価査定業務が行政側の都合で滞る場合には罰金まで規定されていることが特徴である。また第 20 条では農村部の土地所有者が任意でこの地方都市を対象とした火災保険に加入する道も開いていることが注目に値する。

なおこの後、農村部でも所有財産に対する火災保険のニーズが高まり、1792 年には農村部家屋のための王立の一般的火災保険会社 *Den almindelige Brandforsikring for Landbygninger*<sup>41</sup> が設立され、農村部の土地所有者も保険に加入出来るようになった。

この強制火災保険システムの導入から窺えるのは、絶対王制側の商業繁栄時代の都市を火災から守る、という強い意思である。その背景にあるのは 1728 年のコペンハーゲン大火による経済的損失が国家にとってもコペンハーゲン市民にとっても甚大すぎたということであろう。そして、この火災保険が都市だけでなく後には農村にまで拡大されていることは注目に値する。最終的にはデンマーク全土が火災保険システムに包含されるのである。

## 5. 農業改革他

### 5-1 『デンマーク・ノルウェー経済雑誌』の発刊 —農業改革を通じての世論形成—

1755 年 3 月 31 日の国王誕生日を記念して、「国の繁栄を維持するのに益する全ての事柄」についての公開討論に似た、意見交換の論文が政府主導で募集されることになった。そしてその結果、投稿論文は 1757 年に発刊される『デンマーク・ノルウェー経済雑誌 *Danmark og Norges Oekonomiske Magazin*』に掲載された。編集長は聖職者で以前ベルゲン監督も務め、当時コペンハーゲン大学副学長 *prokansler* のポントビダン *Erik Pontoppidan*<sup>42</sup>(1698-1764) で、政府から発行許可も得ていた。雑誌の発行目的が、一般にそして社会に資する市民的問題を議論することであり、この雑誌は基本的に誰でもが、何についてでも書け、これだけに限って検閲は除外された。政府も良い意見や考えが示されれば参考にしようという興味を持っていた。『デンマーク・ノルウェー経済雑誌』の各号には課題があり、優秀論文には金・銀メダルが授与された。課題は例えば「如何にすれば農業生産が増やせるか」というような実際の農業技術関係のものが多く、賦役・小作関係等の議論を呼びそうな社会的課題は少なかった<sup>43</sup>。投稿者

は地主、教区牧師、農業や経済に詳しい市民、読み書き能力のある農民などであった。しかし、この雑誌は7年後に廃刊となってしまった。その背景には、同じような課題を同じような投稿者が、同じようなことを書くようになってマンネリズムに陥ったことがある。しかしながらこの雑誌の果たした役割は大きく、農業に対する人々の関心を喚起したし、発刊を機に他の様々な書物・雑誌・パンフレットなどの出版が盛んになり、なかにはこの『デンマーク・ノルウェー経済雑誌』には言及が少なかった農民の社会状況を論ずるものも出てきた<sup>44</sup>。

発行期間こそ短期間ではあったが『デンマーク・ノルウェー経済雑誌』発行の意義は大きく、政権側の改革への関与、換言すると社会への関与を示すと同時に絶対王制下、統治を行う側が国民のもつリソースや意見に着目し、期待していることをも示している<sup>45</sup>。そして雑誌発行の結果として、農業の生産性(量)向上を論ずれば必ず、農業の改革、究極的には農民の待遇改善に行き着かざるをえないことが明確になったのである<sup>46</sup>。

### 5-2 1757年の農業委員会設置と農業改革

『デンマーク・ノルウェー経済雑誌』が発刊された同じ年の11月にモルトケらの要求により初の農業委員会 *landvæsenskommission* が設置された<sup>47</sup>。委員会のメンバーはモルトケ、ホルステイン J.L. Holstein-Ledreborg, ベアケンティン C.A. Berkentin, オット・ソット Otto Thott の4人で<sup>48</sup>、その設置理由は、「農業の進歩と利益 *Landvæsenets Fremtarv og Nytte*」のためであり、具体的には地主直営地における生産増加促進が目的であった。この背景には穀物価格がようやく上昇するなか、生産量を増強するには農地を拡大する必要があったことがある。具体的には、個々の農村・農地間にある共同牧草地 *overdrev* を廃止して農地に転用しようというのである。委員会ではこの共同地の廃止を含めて12の課題について討議され、まず各地の地主に農村間の共同牧草地の廃止について意見を回覧板方式で募ることになった。しかし、その回答を待たず1758年(対象はシェラン地方、アマー島)、1759年(対象はフエン・、ロラン＝ファルスター地方)、1760年(対象はユトランド地方)と三度にわたって当該事項に関する勅令が公布された<sup>49</sup>。このように、案件の回答を各地から受領する前にこのような勅令を公布したことからは、政府が農業生産増強の改革を本気で推進しようとしている姿勢が窺える<sup>50</sup>。

またこの委員会の設置から言えることは、18世紀半ばの好景気をさらに享受するには根本的な改革が不可欠だと、地主でもある政府の中樞が認識したことである。また地主側も生産拡大のためには賦役の強化や農民の土地への緊縛だけではなく、農地の大半を占める農民保有地の改革の重要性も先の『デンマーク・ノルウェー経済雑誌』などを通じて認識し始めていた。ただ、委員会は社会における農民の状況改善については何も語っておらず、これが次の政権の課題となっていくのである。

さて農地拡大に関して、デンマークにはヒース *hede* 地帯という未開拓の荒野がユトランド半島を中心に残っていた。このヒースの開拓も政府にとっては歴史的に大きな課題であった。そこで政府は1751年に、ユトランド半島に広がるヒース地帯を開拓して耕作することが可能かということを検討する委員会を設置した。その結果、ユトランド半島の *Alheden* 及び *Randbøl Heden* に入植者を導入して開拓を試みることになったが、期待したほどの結果は得ら

れなかった。また 1757 年にはドイツ人官房学者ユスティ J.H.G.von Justi を招聘して、開拓に当たらせた。彼自身はデンマークのヒースのことは余り詳しくなく、計画も楽観的すぎた嫌がある。

デンマークにおける農業改革はこの後、クリスチャン 7 世の時代に大きく進展し、大農業改革 stor landboreformerne と呼ばれる。改革の継続性からみるとこのフレデリック 5 世時代の農業委員会設置がその大改革の嚆矢だと言っても過言ではない。

### 5-3 土地緊縛制の強化

1733 年に当時の農業危機下、安価な労働力を固定し、国防に資する民兵徴集にも役立てるという目的で導入された土地緊縛制は経済状況や軍事状況に合わせて次第にその範囲を広げ強化されてきた。

まず 1746 年には、当時の牛疫病で甚大な被害を被った農村を救うため、民兵兵役終了後は民兵に徴集された農地で小作を相続することが強制された (1746 年 7 月 1 日勅令第 2 条)。そして 1764 年 4 月にはフレデリック 5 世時代唯一の土地緊縛制を強化する法律 (Forordningen af 13. April 1764) が公布された。この強化の背景には先述のように 1762 年にロシア皇帝交代によって一触即発の事態が発生したからであり、先行していた軍事改革とともに軍備を増強しておく必要があったのである。これにより土地に拘束される者の年齢幅が、以前は 9-40 歳であったものが、4-40 歳に拡大された。単純に計算すると農村総人口 (男子) の約 60 パーセント以上<sup>51</sup>が、自分の出生した村落に固定されることになったのである。これにより農村における地主の農民に対する権限はさらに増強される結果となった<sup>52</sup>。

また、このフレデリック 5 世治世下で注目すべきことは、1756 年にクロンボー・フレデリクスボー両県の知事 Fr. C.グラム Gram が「最低 3 年間兵役に従事してからでないと、小作地相続ができない」ことを大蔵省に提案したことである<sup>53</sup>。それ以前は農業優先で、たとえ兵役期間中であっても小作地を相続することで残りの兵役は免除されていたが、今回の提案ではまず 3 年間兵役に就いてからでないと小作地が相続出来ないと、軍事面を農業より優先する考えが示された。この提案が出てきた背景には、農業全般の回復、それに七年戦争の影響があったと思われる。なお、同様の軍事優先を内容とする提案が、1764 年に王国官房からも出されていた。

このようにフレデリック 5 世治世は、農業面と軍事面の両方を含む「土地緊縛制」において従来とは異なり、軍事面をより優先する動きが出てきた時代でもあった。

### 5-4 個人のイニシアチヴによる農業改革

外国の情報も得ることが可能である富裕な地主層は、自己所有農地において、個人のイニシアチヴという形での改革を試みている。例えば、皇太后ソフィエ・マグダレーネ Sofie Magdalene は、ヒュースホルムの所有地でいとこのソルベア Christian Solberg の援助を得て、1759-1761 年に賦役廃止、十分の一税の金納化、世襲小作化を進めている。一方ベアンストーフは首都近くのゲントフテの自領で、当時としてはさらに進んだモデルとなるよ

うな改革を行っている。具体的には農場が穏当な価格で農民に売却されたり、賦役が金納化され、共同耕作地が条地統合 *udskifte* されたのである。加えてコペンハーゲン市所有の農場でも世襲小作化が進められた(1763-68年)。さらにモルトケも南シェランにある領地 *Bregentved* で伝統的な共同耕作地を廃止したりして生産を増強するような改革を実施している。彼は農業の発展にも目を配り、公的にも1757年に農業委員会も立ち上げたが、農民の社会的・法的地位改善といった面に目を向けていた訳ではなかった。

一方、地方によっては農民自身も改革に参加している。例えば小作農が集団で農場を買い取り、自作農になった例もある<sup>54</sup>。ユトランド半島西部や北部では小規模の農場を小作農が共同で買い取るというような動きが続き、農村における農民の構造が変わっていった。このような農民の新しい動きも穀物価格が上昇に転じ、経済が好転したことが背景にあったのである。

### 5-5: サン・ジェルマン *Saint German* の軍制改革

前述のように中立政策を採っていたデンマークは、同時にそれを維持・強化する意味で軍制改革を行なう必要に迫られていた。その改革を推進したのが1761年に将軍として雇用されたフランス人軍人サン・ジェルマンであった。彼は1762-63年の新年を迎えた頃より、大きなプロジェクトに着手し、最終的には地主支配にまで決着を付けようとしていた。1764年4月に彼は古い民兵徴集制を廃止し、農民男子から成る民兵と常備軍を一体化させた軍隊の構築を計画する。金のかかる傭兵から、金のかからない自国軍 *nationalhær* への移行を目指したのである。軍事的な観点からすると、これは大変意味のあることであるが、地主、換言するなら大土地所有者からなる政府上層部からすると、既得権の損失に繋がる話であった。1733年に土地緊縛制が導入されて以来、この制度は若年農民男子を出生農地に縛り、地主が徴兵権を持つ優位性の上に成り立っていた。もし、土地緊縛制が廃止されると、モルトケやベアンストーフに富をもたらし、権力を与えた地所システム *godssystem* が弱体化してしまう危険性があった。そして何より問題であったのは、実質上の戦争大臣でもあったサン・ジェルマンは、軍事に興味を持っていた国王フレデリック5世と直接に話をする事が出来、自分の思い描くプランを示すことができたことである。これは国王側近のモルトケ達には脅威であり、何とか阻止しようと試みたが、結局はそれほど目立った成果は上がらずじまいであった。そして、王位交代に際して、サン・ジェルマンは新国王のサポートを受けることが出来ず、結果的にデンマークから去ることになった。それゆえ、軍制改革も中途半端に終わってしまったのである。

サン・ジェルマンの改革でも提案されていたように、デンマークの今後の発展のためには、土地緊縛制を始め農地に根ざした民兵徴集制も含めて農地・農業に関わる改革が求められており、それは次の国王の統治下で本格化することになる。

## 6. おわりに

以上、フレデリック5世の統治時代と社会政策をみてきたが、統治期間の20年間(1746-66年)は中立政策が採られ、戦争のない平和な時代であった。植民地貿易も1755年に国有化され、カリブ海植民地のセント・トーマス島が自由港となり、コペンハーゲンに砂糖精製所が立



ち並ぶなど、商業発展の時代でもあった。その発展を背景に、大北方戦争終了後に続いた農業危機を乗り越え、さらなる発展を目指すなかで、必然的に農業改革への動きも出てきた。

社会政策でみると前国王のクリスチャン6世時代に学校教育制度が一応整い、それを実行・運営する時代でもあった。また1753年には母子家庭の子弟に職業訓練を目的とした王立養育学校が設立されている。そして1757年には国王によって王立フレデリック病院という入院設備も備えた本格的な病院が設立された。さらには1761年には1720年代のコペンハーゲン大火の経験をもとに強制加入の全国都市火災保険システムが構築された。これらのことは、1661年に導入されて100年が経過した絶対王制という政治体制が安定し、国家が国民の健康・福祉・ウェルビーイングに目を向ける余裕が出てきたことを示している。

文化・学術面でも、探検隊をオリエントに派遣して貴重な資料を収集することに成功し、「祖国の歴史のための王立デンマーク協会」のような学術団体も次々に設立された。またフレデリック5世が即位して以降、娯楽が解禁され、首都を中心に、演劇が市民の間に広がるなどめざましい成果が示された時代でもあった。

国王の統治についてみると、フレデリック5世時代は絶対王制導入以降、絶対王が直接統治を行なわなかった初めてのケースであった。代わりに宮廷長官のモルトケが、20年間事実上の首相として国を率いた。彼は野心・私心はなく、忠実な友人として国王に仕えた。国王が政務不能状態のため、反対派が付け入る隙は確かにあったが、絶対王制も政治体制として既に安定して機能していたため、対抗勢力であった旧貴族も特段目立った動きを見せなかった。その意味でもフレデリック5世時代は、側近であるモルトケを中心にベアnstーフ、レーヴェントロウといったドイツ系官僚が外交も含めてデンマークの政治を動かすことができた時代であった。前王の時代よりもさらに進んで、「官僚主導型絶対主義」のクライマックスが現出されたのである。

ここで国王フレデリック5世の最期を記して本稿を閉じたい。

デンマーク国王フレデリック5世は、1760年に骨折をして以来体調が優れなかったが、1764年頃よりその体調は悪化し、夏はフレデンスボー城で過ごしたが外出できなかった。翌65年にはさらに体調は悪くなり11月になってようやく何とかコペンハーゲンに戻れたほどである。浮腫に悩まされ、侍医の処置を見たモルトケが卒倒するほどのものであった<sup>55</sup>。死の直前には亡くなった王妃ルイセに対して自己の悪行への許しを請うたとも言われている<sup>56</sup>。最後はクリスチャンスボー城で、1766年1月14日に生涯忠実であった友人かつ宮廷長官のモルトケの腕の中で亡くなった。享年46歳の若さであった<sup>57</sup>。そして、枢密院メンバーの最年長者であるベアnstーフがクリスチャンスボー城のバルコニーで、当時僅か16歳だったクリスチャン7世が絶対王を継承したことを宣言した。

フレデリック5世の死は父王クリスチャン6世とは異なり、人々から悼まれた。当時の著名な詩人ヨハネス・エーヴァルがフレデリック5世の死を悼み次のような哀悼のカンタータ *sørgekantate* を捧げている。

「なんと悲しいことか！ 最大の宝なる我らが亡き王を埋葬せよ O ynkl! Så bær da Norden

din største skat til jorden<sup>58</sup>」

国王を 20 年間支えたモルトケは、葬儀を取り仕切った後、新政権の有力者とそりが合わず無年金で解任という憂き目をみたのであった<sup>59</sup>。なお、フランス人彫刻家サリィ Saly の手によるフレデリック 5 世を記念する国王騎馬像は、18 年の歳月をかけて 1771 年に完成し<sup>60</sup>、現在もアマリーエンボー城を訪れる人を馬上で迎えている。

繰り返しになるが、フレデリック 5 世は前王と異なり国民に愛された絶対王であった。しかし、過度な飲酒に由来する政務不能などの事情により、政治には殆ど携わらなかった。それゆえ、完全な「官僚主導型絶対王制」が現出することになったのである。

## 註

<sup>1</sup> Cf. <https://www.nytimes.com/2021/02/09/arts/design/frederik-v-bust-denmark.html> また旧植民地側の反応としては現米領ヴァージン諸島のセント・トーマス島の奴隷解放記念公園に設置されていたデンマーク国王クリスチャン 9 世の銅像が撤去されている。

Cf. <https://stthomassource.com/content/2021/03/29/danish-kingss-bust-removed-to-make-way-for-emancipation-history/>

<sup>2</sup> 以下を参照。 <https://contestedhistories.org/wp-content/uploads/Denmark-Bust-of-King-Frederik-V-in-Copenhagen.pdf> (2023 年 12 月 17 日参照)

<sup>3</sup> これまでの研究状況であるが、フレデリック 5 世自身とその時代についての研究は盛んではない。古いが定評があり、子細に渡って記述されているのはホルム Holm の次の研究である。Holm, Edvard: *Danmark-Norges Historie fra den Store Nordiske Krigs Slutning til Rigernes Adskillelse 1720-1814*, Bind III, K.1897-98. その他は通史的記述で次のものがある。Bech, S.C.: *Oplysning og tolerance 1721-1784 (Politikens Danmarkshistorie. Bd.9)*, K. 1965. Feldbæk, Ole: *Gyldendals Danmarkshistorie*, red. Aksel E. Christesen mf., Bind 4, K. 1982. Feldbæk, Ole: *Gyldendals og Politikens Danmarkshistorie*, red. Olaf Olsen, Bind IX, K.1990. フレデリック 5 世のみを取り上げたものには簡便であるが次のものがある。Busck, Jens: *Frederik V - Kongen der opgav at herske*, K. 2019. 最近の研究成果は、Mentz, Søren: *Frederik V - Den elskværdige europæer*, K. 2023. であり、特徴は史料として同時代にデンマークに駐在した英国外交官の文書を用いていることである。ただフレデリック 5 世時代の社会政策のみに絞った記述は殆どみられない。

<sup>4</sup> デンマーク語では Moltke を「モルケ」と発音するが、本稿では彼がドイツ系であることを強調する意味では「モルトケ」と表記する。

<sup>5</sup> 一応はデンマーク語の教育を受けている。Cf. Mentz, Søren: *Frederik V - Den elskværdige europæer*, K. 2023, s.34.

<sup>6</sup> 一時父王は息子の行状を見て王位継承者としなないことも考えたが、顧問達が思い止まらせた Fabricius, K.(red.): *Danmarks Konger*, K.1944, s.156.

<sup>7</sup> このことをホルベアもいたく喜んで記している。Feldbæk, Ole: *Gyldendals og Politikens Danmarkshistorie*, (red. Olaf Olsen), Bind IX, K.1990, s.215.

<sup>8</sup> Orgier については、フレデリック 5 世と同時代を生きたビール Charlotta Dorothea Biehl が、王宮に近い筋から聞いた話を書簡形式で書いた史料に登場している。通常、フレデリック 5 世の飲酒、女性関係についてはこの史料が用いられる。ビールは例えば国王が女性を鞭打つ姿を見ては楽しんだ等記している。Cf. Bang, J.H.: *Charlotte Dorothea Biehls historiske Breve*, *Historisk Tidsskrift* 3. Række, IV Bind (1865 - 1866).

<sup>9</sup> 本名は Else Hansen (1720 頃～1784)で、通常マダム・ハンセンと呼ばれ、出産の度にフン島に滞在した。後には貴族に叙せられている。ここまで長きにわたる愛人関係は珍しい。なお彼女以外では Charlotte Amalie Winge (1762-66) が知られている。

<sup>10</sup> Arveprins Frederik. 母であるユリアネ・マリエは彼を、王太子クリスチャンを差しおいて次期国王にしたいと考え後に様々な画策を行なう。

- 11 強いていうなら軍事方面に少し興味を有していた。
- 12 Cf. Hille, G.(udg.): Grev Adam Gottlob Moltkes Plan for Frederik den Femtes Regering, Historisk Tidsskrift, 4.række, 4.bind(1873-74), ss.43-64.
- 13 Cf. C. F. Wegener: 'Grev Adam Gottlob Moltkes efterladte Mindeskrifter,' Historisk Tidsskrift 4. Række, II Bind (1870 - 1872), ss.129-331.
- 14 1748年のオルデンボー王朝 300周年を記念して、新国王の名を冠した街とその建築計画が浮上した。新しい街はフレデリクススターデンと呼ばれ、現在も存在するアマリエンボー城、フレデリック 5世の騎馬像、教会等が配置されることになった。王室建築主任であったアイグトヴェズ Nicolai Eigtved がモルトケからの依頼で全体像を立案した。銅像の前には記念碑的な教会を配置し、神と国王が共に街の軸線となり、像の周囲にはアマリエンボー宮殿でもって象徴される忠実な貴族を現した。アマリエ通りの新しい商館は新しく商工業が国家にとっていかに重要な意味を持つのかを示す。その周囲に市民層が居を構え、そして国民の福祉を象徴するフレデリック病院が位置している。これらは絶対王が統治する社会のあるべき姿を投影していた。ある意味でモルトケの国家はこうであるべきだという国家観が現れているともいえる。国王は国政に殆ど寄与しなかったが、彼の顧問達は彼に栄誉をもたらしたのであった。 Cf. Busck, Jens: Frederik V -Kongen der opgav at herske-, K. 2019, ss.12-23.
- 15 モルトケの後押しがないものについては国王も認めなかったため、事前承認を求めてモルトケ詣でが盛んに行われた。
- 16 [https://biografiskleksikon.lex.dk/Adam\\_Gottlob\\_Moltke](https://biografiskleksikon.lex.dk/Adam_Gottlob_Moltke)
- 17 1773年にロシアとの領土交換が実現している。
- 18 サン・ジェルマンの軍事改革については本稿の第5章第5節を参照。
- 19 Ottosen, op.cit., s.79.
- 20 <https://danmarkshistorien.dk/perioder/enevaelde-1660-1814/den-oekonomiske-udvikling-kolonier-og-landboreformer>
- 21 フレデリック 5 世時代の経済的繁栄は、植民地からの砂糖であったとされている。  
Cf. <https://roskildedomkirke.dk/besoeg/kongegrave/frederik-5-kapel>
- 22 1764年にカリブ海植民地のセント・トーマス島の港が自由港になったことの意味も大きい。
- 23 騎士学校設置 (1720年) については、拙稿「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究 (2) -フレデリック 4 世治世 (1699-1730年) を中心に-(下)」『東海大学文化社会学部紀要』第9号、2023年、151-153頁を参照。1739年の学校令については、拙稿「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究 (3) -クリスチャン 6 世治世 (1730-1746年) を中心に-」『東海大学文化社会学部紀要』第10号、2023年、130-131頁を参照。
- 24 1736年の堅信式導入については以下を参照。拙稿「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究 (3) -クリスチャン 6 世治世 (1730-1746年) を中心に-」『東海大学文化社会学部紀要』第10号、2023年、128-130頁。
- 25 デンマークにおける敬虔主義が教会や社会においてその役割を終えた時期を特定するのは難しいとされている。Lausten, Martin Schwarz: Kirkens historie i Danmark - pavekirke, kongekirke, folkekirke-, K. 2018, s.67.
- 26 'Mellem pietisme og romantik', <https://danmarkshistorien.dk/vis/materiale/oplysningstiden>
- 27 当時、貴族子弟はある時期、知識と経験を求めて海外に遊学に出掛けることが慣習であったが、多額の出費をして外国に出掛けなくとも必要なことが国内で学べるようになった。
- 28 Petersen, Kai : Danmarkshistoriens hvornår skete det, K.1985, s.235.
- 29 その代表格が次のクリスチャン 7 世時代に農民・農業改革を推進する C.D.F. レーヴェントロウである。
- 30 Jensen,Hans: Dansk Jordpolitik I, K.1936, s.29.
- 31 フレデリック教会は先述のフレデリクススターデン計画の一部として 1749年に建設が始まった。王立建築士のアイグトヴェズが主導した。ノルウェー産の大理石がふんだんに使用されているため別名「大理石教会」とも呼ばれる。建築費が嵩み、1770年には工事が一時中止になった。最終的には約 150年かかり、1894年に竣工した。
- 32 現在でも、王立デンマークアカデミーの一部がシャーロットンボー宮殿におかれている。
- 33 アビルゴーはデンマークに帰国後、芸術アカデミーの教授となった。代表作は「オシアン」(傷ついたピロクテテス) 等で、当時デンマークを代表する彫刻家のトーヴァルセンもアビルゴーにアカデミーで彫刻の指導を受けている。また、イェンス・ユールは海外留学後、王室肖像画家となり当時の名だたる王侯貴族の肖像画を描いた。また当時の農村風景も多数描き、芸術アカデミー院長も務めている。
- 34 Feldbæk, op.cit., s. 211.
- 35 例えば enkelthed (「単独的である」の意) 等デンマーク語の新しい語を作り出している。デンマーク

語はそれまで文化的には奥の深いラテン語やドイツ語、フランス語の影響を強く受けてきており、デンマーク語にはない表現の場合、それらの原語表現を用いていた。当時の文化の中心地である宮廷でも通常ドイツ語が話されていた状況下、それらを的確に表現するデンマーク語を創出したのである。Cf. Feldbæk, op.cit., ss.211-212.

<sup>36</sup> グラム Hans Gram(1685-1748)は歴史家であり、1714年よりコペンハーゲン大学のギリシャ語教授であった。1730年には王立史料編纂委員に任命されている。言語学の業績も多い。

<sup>37</sup> 例えばホルベアの喜劇に『丘のイエッペ Jeppe på Bjerget (1722年)』がある。その中では小作農民と地主を入れ替えて物語が進行するが、小作農の貧しい生活状況と地主の贅沢な生活を対照的に描写して、そのギャップを風刺的に伝えている。

<sup>38</sup> 地元では同校の生徒を伝統的に skorper と呼んでいる。そして学校も Skorper 学校と呼ばれている。現在も学校として存続し、1995年からは女子も受け入れている。

<sup>39</sup> キェルケゴールは1855年11月11日にこのフレデリック病院で息を引き取った。

<sup>40</sup> 2011年より、デンマークデザイン博物館 Designmuseum Danmark となっている。

<sup>41</sup> この会社が発展して現在の「一般保険会社 Alm. Brand」となっている。

<sup>42</sup> 彼の作成したデンマーク国教会のカテキスムスは1734年以来、約200年間に渡ってデンマーク・ノルウェーの宗教思想・教育に大きな影響を与えた。

<sup>43</sup> 雑誌に掲載されている論文の内容を大別すると、重商主義的なものが約50パーセント、重農主義に関係するものが約25パーセントであった。Jens Christiansen: Rural Denmark 1750-1980. K. 1983, s. 30.

<sup>44</sup> Ibid., s.28.

<sup>45</sup> Feldbæk, op.cit., s.210.

<sup>46</sup> このように、国王謁見制\*、請願制度を含めて絶対王制が国民の意見を聞くシステムがデンマーク絶対王制にはあり、それが「意見によって動かされる絶対王制 Opinion styret enevælde」と呼ばれている。王権側もこのシステムを通じて国民の考えを直接聞くことができるのである。\*国王謁見制はフレデリック4世時代、1720年代から始まり、毎週決まった曜日に国民が国王と自由に謁見出来る制度で、現在でも存在し、隔週の月曜日午前中に実施されている。

<sup>47</sup> モルトケはすでに政権発足直後にプログラムとして委員会の設置を述べていた。Cf. Hille, op.cit., ss.43-64.

<sup>48</sup> ベアケンティン以外は枢密院メンバーであった。

<sup>49</sup> それぞれ Forordningen af 29. Dec.1758, Forordningen af 28. Dec. 1759, Forordningen af 8. Marts 1760.

<sup>50</sup> ただ結果的にみると共同牧草地の廃止は非常に緩慢にしか進行しなかった。それはこれらの勅令が拘束力を伴っていなかったからであろう。Cf. Holmgaard, Jens: Landboreformerne - drivkræfter og motiver-, Fortid og Nutid, Bind 27, 1977-78, s.42.

<sup>51</sup> Johansen, H.C.: ‘Some Aspects of Danish Rural Population Structure 1787’, “Scandinavian Economic History Review”, IX, 1972, s.63 を参考に筆者が算出した。

<sup>52</sup> さらにこの勅令公布の背景には、1761年、62年に兵士を臨時補充した際の地主（徴兵権を有している）に対する見返りがあったともいわれている。Jensen, op.cit., s.44.

<sup>53</sup> Fredericia, J. A.: Aktstykker til Oplysning om Stavnsbaandets Historie, K. 1888, s.156.

<sup>54</sup> ユトランド半島の Lemvig の小規模な農場 Gudumlund は1757年に競売にかけられ、小作農が10人集まってそれを買い取っている。Feldbæk, op.cit., s.253.

<sup>55</sup> Busck, op.cit., s.50.

<sup>56</sup> Ibid., ss.50-51.

<sup>57</sup> 死後、遺体に香油を塗る際、彼の肝臓は積年の飲酒が祟った結果「石のように固かった」と言われている。Ibid., s.51.

<sup>58</sup> Cedergreen Bech, S: Oplysning og tolerance 1721-1784, Politikens Danmarkshistorie, Bd.9, K. 1985, s.408.

<sup>59</sup> その後1767年には一端枢密院メンバーに返り咲き、農業委員会にも属した。しかし、権力闘争に敗れ1770年には再度無年金で解任されるなどしたが、1681年にロシアとの領土交換が成功したため、それに関わった功績により年4000リースダーラの年金を得ることになった。

<sup>60</sup> 費用はアジア会社として社長のモルトケが工面した。像はローマ帝国の皇帝を彷彿させる凛々しいものである。

## フレデリック 5 世関連年表 \*

- 1723 年：フレデリック 5 世が誕生する。
- 1730 年：メクレンブルク出身のモルトケ Adam Gottlob Moltke が王太子フレデリックの侍従 kammerpage になる。
- 1735 年：モルトケが王太子の侍従長 kammerjunker になる。
- 1743 年：王太子フレデリックが英国王女のルイセと結婚する。
- 1746 年：クリスチャン 6 世の逝去により、23 歳のフレデリックがフレデリック 5 世として即位する。新国王は国民との距離を縮めるべく王宮前の重い鉄の鎖を取り除き、敬虔主義による修道院のような王宮もようやく明るさを取り戻す。モルトケが宮廷長官 overhofmarskal に任命され、以後国王と大臣達の仲介役となる。  
ロシアと期間 15 年の防衛同盟を結ぶ。さらにパリ駐在の公使、ベアンストーフ J.H.E. Bernstorff によりフランスとの同盟が更新される。
- 1747 年：デンマーク領西インド諸島への航海は西インド・ギニア会社のみに許可される(1月)。コペンハーゲンの Læderstræde に新しい劇場が開場し(5月)、クリスチャン 6 世時代の敬虔主義で下火となったデンマークの劇場文化が新たなエネルギーを得ることになる。新ソーロー・アカデミー Sorø Akademi が竣工する。このアカデミーは貴族子弟が官僚になるための養成機関であるが(官僚絶対主義にも関係)、啓蒙思想が普及する場ともなる。
- 1748 年：コペンハーゲン市内のコンゲンズ・ニュートーヴ Kongens Nytorv にある劇場の新舞台(観客数 728)が落成する。
- 1749 年：新聞『Berlingske Tidende』創刊される(1月3日)。フレデリック 5 世はオルデンボー王朝発足 300 周年を記念して首都にフレデリック教会(別名：大理石教会)の建立を開始する(なお、この教会の完成には 145 年を要した)。
- 1750 年：国王フレデリック 5 世が A.G.モルトケに地所 Bregenved を贈り、それが他の地所とともに伯爵領に格上げされる。ドイツ生まれの市民出身外務大臣である J.H.シューリンが突然死去する(4/13)。スウェーデンの王位継承者であるアードルフ・フレードリック Adolf Fredrik はフランスとハット党の圧力により、スレースヴィイのゴットーブ家領への世襲権を断念する。長い協議の結果、スウェーデンとの交渉が成立した。アードルフ・フレードリックは、自分と自分の子孫が以前のスレースヴィイ・ゴットーブ家領に対する権利を諦めた。
- 1751 年：チュニジアと通商条約を締結する。ベアンストーフが枢密院 konseilet のメンバーとなり、5ヶ月後には外務大臣となる。彼の最初の任務はロシア次期皇帝 Peter とのゴットーブ問題を解決することであった。ベアンストーフはデンマーク＝フランス同盟の支持者である。ノルウェー北部の国境がスウェーデンとの条約で画定される。Lappekodici と呼ばれる条約ではサーム人の権利について取り決められている。  
スニードーフ Jens S. Sneedorff がソーロー・アカデミーの法律・政治の博士になった。彼は 1759 年に設立された学術振興協会の設立を主導し、雑誌『Den Patriotiske Tilskuer (愛国的傍観者)』を発行した。王妃ルイセが死去する(12/19)。
- 1752 年：フレデリック 5 世がブラウンシュヴァイク Braunschweig のユリアナ・マリエ Juliane Marie と再婚するが、彼女は宮廷で冷遇される一方、国王の方はアルコールへの依存が強くなる。トリポリスとアルジェやチュニスと同様の通商条約を締結する。牛疫病が広がり 30-40 万匹が死ぬ。
- 1753 年：モロッコと通商条約締結。1851 年以降の北アフリカにおけるイスラム教国と一連の条約を結ぶことによって、デンマーク商船の地中海における航海の安全を確保しようとした。  
フランスの彫刻家サリイ Saly がコペンハーゲンへやって来る。新王妃との間に相続権を持つ王子 arveprins フレデリックが誕生する(10月)。
- 1754 年：西インド＝ギニア会社が解散し、国家がその株式を入手する。関連業務及び所有要塞等を引き継ぐとともに、西インド航路も自由化され、国民(デンマーク・ノルウェー、スレースヴィイ在住者)に開放された。  
ホルベアが死去し、ソーロー修道院教会 Sorø Klosterkirike に埋葬される(1/28)。王立画家・彫刻家・建築アカデミーの名のもと、芸術アカデミーが創設され、アイグトヴェズ Nikolai Eigtved が院長になる。彼は宮廷建築士でもあり、アマーリエンボー城の設計も担当している。
- 1755 年：国家が西インド諸島を引き継ぎ、ブロック Baron v. Præck が植民地総督 general guvernør に任命される。西インドとアフリカにおける通商が自由化される。ベンガル政府はアジア会社に

Serampore という町を含んだ地域を委譲し、その地域は後に通商拠点 **Frederiksnagore** という名を得る(国王の名にちなんでいる)。

クリスチャン教会の礎石が据えられる。同教会の会衆は大半がドイツ人であった。当時は首都人口の約 5 人に 1 人がドイツ語を母語としていた。宮廷に出仕していたレーヴェントロウ **Ditlev**

**Reventlow** がクリスチャン王子の養育を担当するようになる。また、絶対王制政府は国家経済を進行させる提案を広く国民一般より募集する。良き提案については印刷して公表される。

- 1756 年：7 年戦争が勃発する。外相ベアンストーフはデンマークを経済的利益を享受できる局外中立の立場に立たせるために努力する。結果的に中立政策が功を奏し、交戦国の物資をデンマーク・ノルウェーの船舶が輸送し多大な経済的利益を得る。

デンマークはスウェーデンと中立の協力関係を結ぶ。このことについてはフランスから後押しがあった。インド派遣隊がデンマーク国王の名のもとに、ニコバル諸島を占領し、島名をニュー・デンマーク **Ny Danmark** に改名する。

- 1757 年：モルトケが 1746 年に提案していた農業委員会が設置される。委員会の構成はモルトケ自身及び、5 人の枢密院メンバーのうちの 3 名よりなっていた。委員会設置の主目的は地主直営地 **hovedgaard** の生産増強を進めることであり、委員会は 1758 年、1759 年、1760 年に法律を公布し共同地 **overdrev** の条地統合を容易にした。酔態に対しての罰金が導入される。王立フレデリック病院 **Det Kgl.Frederiks Hospital** (現在の王立病院の前身) が竣工する。この病院はデンマーク最初の実際の治療を行なう病院で分娩室も備わっていた。

デンマークは英国とフランスの仲介を行ない、ハノーバーの中立を保障する。1757-64 年に 8 巻から成る『デンマーク・ノルウェー経済雑誌』を刊行し、聖職者のポントピダン **Erik Pontoppidan** が編集・発行した。雑誌の内容は社会経済の推進に資する論文であった。このことは国家が初めて社会に関する言論に関与する意思を示している。

- 1758 年：オット・ソット **Otto Thott** 伯爵が枢密院のメンバーとなる。プロシアを中心とする 7 年戦争が勃発したため、デンマークはフランスと締結していた同盟条約により 24,000 人の兵士を派兵することになる。同時に英国とプロシアへの援助を実行しないことを求められる。

グリーンランドへの布教を行ない、「グリーンランドの使徒」と呼ばれるハンス・イーエゼが死去する (11 月 5 日)。共同耕作地 **jordfælleskab** を制限する勅令が公布される。

- 1759 年：シェラン島北部で個人的な農業改革が推進される。皇太后ソフィエ・マウダレーネ **Sofie Magdalene** はヒュースホルム **Hørsholm** 城に隣接した土地で改革を始める (具体的には小作人の賦役を金納化等)。ベアンストーフやモルトケの所領地でも農民の状況を改善する改革が開始される。助産婦教育が始まる。**Selskabet til de skønne og nyttig Videnskabers Forfremmelse** (有用な学術振興のための協会) が設立される。

オット・ソットが商務省の局長からデンマーク官房の局長に昇進する。これは中央官庁での最高職である。なおこのデンマーク官房が官僚の任命権を有している。

- 1760 年：プファルツ **Pfalz** から「ジャガイモ栽培ドイツ人」をデンマークに招聘する。関税や諸経費の徴収が西インド・ギニア財務・総合関税局に統合される。クリスチャン王太子 (後のクリスチャン 7 世) の教育がスイス人レヴェルディール **Reverdil** に引き継がれる。彼はベアンストーフによって雇用されたが、彼によれば王太子は妄想 **vrangforestilling** の傾向があるという。

デンマークは 1759 年に結ばれたスウェーデン＝ロシアのバルト海協約に参加する。この協約はバルト海から全ての勢力を排除するものである。デンマーク政府はウルリック公爵 **storfyrster Carl Peter Ulrik** にホルシュタインのゴットープ部分からの撤退と領土交換の提案を行なう。その見返りとしてデンマークは軍事的にロシアのバルト海における政策を支持するつもりであり、もしこれを拒否するならデンマークは逆にプロシアを支持する、という脅しをロシアに行なう。

コペンハーゲンの城壁外で以前はタバコ農場があった場所にアシステンズ教会墓地が設けられる。ペストのような衛生上の理由から、市内での埋葬は避ける必要があったのである。

- 1761 年：政府はデンマークの言語学者ハウエン **Christian v. Haven** 率いる学術探検隊をアラビアに派遣した (7 年後に唯一の生存者である地理学者ニープーア **Carsten Niebuhr** が膨大な資料を携えて帰国するが、彼が正確に複製したペルセポリスからの資料文献は後にこの古文書解読の基礎となり、メソポタミアの古代文明理解に貢献した)。

地方都市が強制的に火災保険に入ることになった (1761 年 1 月 13 日の布告)。政府は前年にウルリック公爵に対して行なった提案に関し、否の回答を得る。デンマーク国王は公爵領 **Plön** を獲得する。

- 1762 年：ホルシュタインに駐留する軍隊の経費負担のための特別税が課される。当初は臨時的なものとしたが、結局は 1812 年まで続いた。関税法が成立する。

- ロシアとの戦争に備えて、フレデリック 5 世の大臣はフランスの陸軍将軍サン・ジェルマン Claude Louis de Saint-Germain を招聘し、壊滅的な状況にあるデンマーク陸軍の立て直しを図る。ゴットロープ家出身のペーター Peter がロシア皇帝となり、デンマークとロシアの関係が一時軍事的に緊迫するが、結局彼は妃のカザリン 2 世に廃位され、大事には至らなかった (デンマークはメクレンブルクに集結したが、ロシアの 4 万人の軍隊は退却した)。
- 1763 年：政府は財政強化のため王領を売却し始める。北ユトランドと北シェランの森林が減少し、流砂のため荒地が増加している。この対策としてドイツより森林エキスパートの ランゲン J.G. von Langen が北シェランの森林資源を増やすために招聘された。レーヴェントロウ Ditlev Reventlow が枢密院のメンバーとなる。勅令により幹線道路の建設が行われる。
  - 1764 年：軍制改革により 1733 年に導入されたクリスチャン 6 世の民兵徴集制が廃止される。土地緊縛制が拡大され、農民男子は僅か 4 歳より土地に拘束されることになる。ベアンストーフの領地で、条地統合・農場分散等の農業改革の試みが行われる。フランスとの援助条約がフランスの意向で更新されず、デンマークはフランスの同盟システムから退出する。勅令によりホルシュタインの住民はデンマークの交易の自由を享受できるようになる。
 

デンマーク領西インド諸島のセント・トーマス St.Thomas 島の港が自由貿易港となる。
  - 1765 年：ロシアと同盟条約を締結する。エカテリーナ 2 世はデンマーク側からの提案である領土交換 (オルデンブルク=デルメンホルストとゴットロープ領ホルシュタインの領土の交換) に理解を示す。デンマークのクリスチャン王太子が英国の王女カロリーネ・マチルダと婚約する。
 

ノルウェーで政府の課税に不満を持った農民が一晩ベルゲンを占領する。
  - 1766 年：フレデリック 5 世が 1 月に死去し、彼の 17 歳の息子がクリスチャン 7 世として即位する。新国王即位に際して一連の大臣の交代も実施されたが、新国王の養育には問題があったため、国王は以後次第に精神を病むようになる。王領地売却が始まる。ユトランド地方における最初の新聞 Aalborg Stiftstidende が発刊される。
 

11 月にはクリスチャン 7 世とイギリス国王ジョージ 2 世の孫娘で遠縁にあたるカロリーネ・マチルダとの婚礼がクリスチヤンスボー城内教会で挙行された。クリスチャン 7 世の妹ソフィエ・マウダレーネ Sofie Magdalene がスウェーデン王太子グスタフ (後のグスタフ 3 世) の元に嫁ぐ。

\* 作成にあたっては主に次のものを参考にした。

Petersen,Kai: Danmarkshistoriens hvornår skete det, K.1985.

Skipper,Jon Bloch(red.): Danmarkshistoriens Årstal, Achehoug og Det Historiske Hus, K.2001.

## フレデリック 5 世時代 参考文献 (発行地が København の場合は K. と略)

Appel,Charlotte og Morten Fink-Jensen: Da Læreren holdt skole: Tiden før 1780 (Dansk Skolehistorie Bd.1), Århus,2013.

Bang, J.H.: Charlotte Dorothea Biehls historiske Breve, Historisk Tidsskrift 3. Række, IV Bind (1865-1866)

Bjerg,Hans Chr.: Danmarks stilling i Østersøen 1700-1900, K.1977.

Bjerg,Hans Chr.og Ole L.Frantzen: Danmark i Krig, Politikens Forlag, K.2005.

Busck, Jens: Frederik V -Kongen der opgav at herske-, K. 2019.

Cedergreen Bech,S: Oplysning og tolerance 1721-1784, Politikens Danmarkshistorie, Bd.9, K. 1985.

Cedergreen Bech,S: Storhandelens by, Københavns Historie Bd. 3 (1728-1830), K.1981.

Christiansen, Jens: Rural Denmark 1750-1980, K. 1983.

Christensen,Svend Aage og Henning Gottlieb (red.): Danmark og Rusland i 500 år, Det sikkerheds- og nedrustningspolitiske udvalg, K.1993.

Engelstoft,Poul og Svend Dahl: Frederik V, i Dansk Biografisk Leksikon, IV, K.1933.  
第 11 号 (2024 年 3 月)

- 
- Fabricius, K.(red.): Danmarks Konger, K.1944.
- Falbe-Hansen,V.: Stavnsbaandsløsningen og landboreformerne, K.1888.
- Feldbæk,Ole: Gyldendals Danmarkshistorie, red. Aksel E. Christesen mf., Bind 4, K.1982.
- Feldbæk,Ole: Gyldendals og Politikens Danmarkshistorie, red. Olaf Olsen, Bind IX, K.1990.
- Feldbæk,Ole m.fl.(red.): Dansk Udenrigspolitik Historie Bind 2, K.2006.
- Fredericia,J. A.: Aktstykker til Oplysning om Stavnsbaandets Historie, K.1888.
- Garde,H.G.: De danske-norske Sømagts Historie 1700-1814, K.1852.
- Hansgaard,Torben: Landboreformerne i Danmark i det 18. århundrede –Problemer og synspunkter-, K.1981.
- Henningsen,Peter: Stavnsbåndet, Århus,2020.
- Hille, G.(udg.): Grev Adam Gottlob Moltkes Plan for Frederik den Femtes Regering, Historisk Tidsskrift, 4.række, 4.bind(1873-74), ss.43-64.
- Holm,Edvard: Danmark-Norges Historie fra den Store Nordiske Krigs Slutning til Rigernes Adskillelse 1720-1814,Bind III, K.1897-98.
- Holmgaard,Jens: Landboreformerne - drivkræfter og motiver-, Fortid og Nutid, Bind 27, 1977-78.
- Holmgaard,Jens: Uden at landet besværes –Studie over Frederik IV's landmilit med særlig henblik på spørgsmålet om stavnsbånd og bønderkarlenes vilkår i øvrigt, K.1999.
- Hvidtfeldt,Johan: Stavnsbaandet, dets forudsætninger og virkninger, K.1938.
- Hvidtfeldt,Johan: Håndbog over danske lokalhistorikere, (Den Historisk Fællesforening), K.1952-56.
- Jensen,Hans: Dansk Jordpolitik I, K.1936.
- Jespersen,Knud J.V.: Gyldendals Danmarks historie Bd.3, (red., Søren Mørch), K.1989.
- Jespersen,Knud J.V.: 1648-1720, I Carsten Due-Nielsen, Ole Feldbæk og Nikolaj Petersen (red.): Danske udenrigspolitik historie Bd.2, Revanche og neutralitet 1648-1814, K.2002.
- Jespersen,Knud J.V. m.fl.(red): Mennesket og statsmanden, Moltke -Rigets mægtigste mand, K.2010.
- Johansen, H.C.: ‘Some Aspects of Danish Rural Population Structure 1787’, “Scandinavian Economic History Review”, IX, 1972.
- Johansen,Hans Chr.: En samfundsorganisation i oprud, Dansk socialhistorie Bd.4, K.1979.
- Jørgensen, Frank og Westrup, Morten: Dansk centraladministration i tiden indtil 1848, K. 1982.
- Jørgensen,Poul Johs.: Dansk Retshistorie, K.1965.
- Larsen,Joachim: Bidrag til Den danske skoles historie, Bind 1, K.1984.
- Lausten, Martin Schwarz: Kirkens historie i Danmark - pavekirke, kongekirke, folkekirke-, K. 2018.
- Lomholt-Thomsen, Johs: Kilder til Danmarks historie efter 1660, Bind I, Historie- læreforeningen, Gyldendal, K.1973.
- Løgstrup,Birgit: Bundet til jorden. Stavnsbåndet i praksis 1733-1788, Odense,1987.
- Markussen,Ingrid: Visdommens lænker, K.1988.
- Mentz, Søren: Frederik V - Den elskværdige europæer-, K. 2023.



- 
- Olden-Jørgensen, Sebastian: Ludvig Holberg som pragmatisk historiker: En historiografisk-kritisk undersøgelse, K. 2015.
- Ottosen, Johan: Vor Historie II, K. 1904.
- Petersen, Kai: Danmarkshistoriens hvornår skete det, K. 1985.
- Rockstroh, K.C.: Udviklingen af den nationale Hær i Danmark II-III, K. 1916-26.
- Schou, J.H. m.fl.: Schous Forordninger I-XXII, K. 1777-1840.
- Scocozza, Benito: Danmarkshistoriens hvem, hvad og hvornår, K. 1996.
- Scocozza, Benito: Politikens bog om Danske Monarker, K. 1998.
- Skipper, Jon Bloch (red.): Danmarkshistoriens Årstal, Achehoug og Det Historiske Hus, K. 2001.
- Skrubbeltrang, Fridlev: Det danske Landbosamfund 1500-1800, K. 1978.
- Thorsøe, A.: Kong Frederik den Femtes Ungdom og Thronbestigelse, K. 1868.
- C. F. Wegener: Grev Adam Gottlob Moltkes efterladte Mindeskrifter, Historisk Tidsskrift 4. Række, II Bind (1870 - 1872), ss. 129-331.
- Østergaard, Rasmus Thestrup: Enevældens tid, systeme, Århus, 2018.
- 佐保吉「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(1)ーフレデリック4世治世(1699-1730年)を中心にー(上)」『東海大学文化社会学部紀要』第5号、2021年。
- 佐保吉「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(2)ーフレデリック4世治世(1699-1730年)を中心にー(下)」『東海大学文化社会学部紀要』第9号、2023年。
- 佐保吉「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(3)ークリスチャン6世治世(1730-1746年)を中心にー」『東海大学文化社会学部紀要』第10号、2023年。